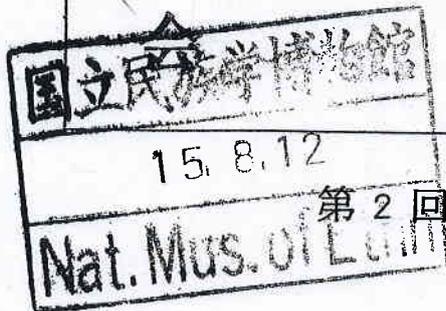


日本アフリカ学会 報

昭和39年7月20 第2号
編集者 日本アフリカ学会
東京都文京区本富士町
東京大学理学部地理学教室内
振替口座・東京 57828



第2回国際アフリカニスト会議

西野 照太郎

1962年12月に第1回大会が開かれ、憲章が採択されて正式に成立した国際アフリカニスト会議 International Congress of Africanists は、かねて第2回大会をセネガルのダカルで開催することを決定していましたが、1965年に予定されていたのが延期されて、1966年12月に開催されることになったと、私たち第1回大会に出席して、一応日本の National Delegation にされているものに、去る5月18日付の同会議事務局からの書簡で通知がありました。同じ書簡によりますと、来るべきダカル大会での統一テーマは、「アフリカ開発における調査研究の役割」 The role of research in African development と決定しており、各分科会の基調報告書はこのテーマに関連した研究報告をしなければなりません。(なお、1963年10月24-26日、サンフランシスコで開かれたアメリカの African Studies Association 第6回大会で、The role of science and technology in African development が、主要なテーマの1つになっていました)。

ダカル大会で予定されている分科会は、次の5部門となっています(スペースがないので英文だけ掲げます)

1. History, Ethnology, Archaeology and Linguistics.
2. Conceptual Problems; Religion, Philosophy, Psychology and Education.
3. Literature, Folklore, Art and Music.
4. Social, Political and Economic Institutions and Modern Related Problems.
5. Science and Technology in the Development of Africa.

なお、この会議の詳細については、1966年大会の事務局長であるダカル大学のアラッサヌ・エンダウ教授 Prof Allassane N' Daw から情報が得られると附記されていたので、私から連絡をとっておりますが、まだ回答がありま

せん。

また、同じ書簡の中で「アックラできめられた各国 national delegations の多くは、単に暫定的な決定にすぎないので、その構成メンバーはその後まだ確認されていない」、という理由から、「できるだけ早く」正式の national delegation を結成して、その名簿を事務局に提出してほしいと勧告しています。日本の暫定的な構成メンバーは、富川、藤田、川田の各氏と私になつておりますので、この件については在京の本学会理事の間でも検討をはじめ、学会関係者とも連絡をとつております。

ダカールでの第2回国際アフリカニスト会議から、もつと詳しい情報が入りましたら御通知しますが、その大会には日本からもできるだけ多くの出席者を、本学会の皆さんの御納得のいく形で、派遣できるようにしたいと考えております。(national delegation と出席メンバーとは無関係です)。5つの分科会に寄与でき、できればすぐれた研究発表もできるような、出席者を選び出せるように、本学会を充実しておきたいのが、私たちの強い念願であります。

§ 人事について

先般行われた理事会で次の人事が決定された。

○幹事、藤田弘二(アジア経済研究所)

○編集委員、西野照太郎(編集長)、浦野起央(『アフリカ研究』編集担当)

長島信弘(『会報』編集担当)中村弘光、矢内原勝

尚、理事は編集委員として随時参加する。

§ 会員の活動状況

4月、京都大学アフリカ調査団の梅棹忠夫氏、富川盛道氏らが帰国

5月23日、名古屋大学アフリカ調査研究会第4回研究会が名古屋大学で行われた。

(1) 浅井恵論『アフリカ研究におけるヨーロッパ各国の動向』

(2) 江上波夫『アフリカおよび近東の旅行談』

5月29日、30日、第3回日本民族学研究大会が立教大学で行われ、次の会員諸氏が報告された。

小堀 巖『エジプトのカナット』

高橋統一『エチオピアにおけるバナナ栽培の起源について』

梅棹忠夫『タンガニーカ・ダトーガ族の牧畜生活』

富川盛道『タンガニーカ・ダトーガ族の社会組織』

富田浩三『タンガニーカ・ディガ族の食生活について』

和崎亘宏『タンガニーカ・バンツー開拓農村の社会構造』

6月26日、NHK・FM放送、「学会だより」の時間に小堀巖理事が日本アフリカ学会について設立の趣旨および将来の課題について放送した。

7月初旬、小堀巖理事は東大イスラエル調査団員として現地に出発、ロンドンでの国際地理学会に出席の後、アルジェリアに寄つてから帰国の予定

7月下旬、岡正雄理事はモスクワで行われる国際人類学会に出席のために渡航

§ 例会 だより

月例研究会は5月、6月にそれぞれ行われ今後も月1回開く予定ですが、7月、8月は都合により休会することになりました。

なお、学会の母胎となつたアフリカ研究会の例会が昨年8月より行われておりましたので、その記録を再録しておきます。

アフリカ研究会について

- 第1回、8月13日、西野照太郎『日本におけるアフリカ研究の系譜と現状』虎ノ門、サカエ
- 第2回、9月17日、藤田弘二『第1回アフリカニスト会議について』虎ノ門、サカエ
- 第3回、10月29日、長島信弘『人類学におけるアフリカ研究史』虎ノ門、サカエ
- 第4回、11月14日、中村弘光『現代ナイジェリアの政治研究』虎ノ門、サカエ
- 第5回、12月18日、岩城 剛『東アフリカの経済統合』虎ノ門、サカエ
- 第6回、2月11日、原口武彦『ロバートのフランス植民経済史について』虎ノ門、サカエ

日本アフリカ学会例会について

第1回例会 5月23日(土) 14-16時、国立国会図書館小講堂で、本学会会長長谷川秀治博士が「熱帯医学とアフリカ」と題する報告書を、スライドを映写しながら行なわれた。1961年5-7月の現地視察を中心としたもので、元伝染病研究所長としての専門的な知識を、わかり易い話術で解説された。出席者約30名

第2回例会 6月27日(土) 14-16時、国立国会図書館小講堂で、慶大助教授矢内原勝氏が「北アフリカ諸国の経済的問題点」と題する報告を、16ミリ映画とスライドも併せて発表された。矢内原氏は最近北アフリカ経済視察団の顧問として派遣されたアラブ北アフリカ6カ国の最新の経済情勢を、平易に解説された。出席者約35名。

§ 雑誌「アフリカ研究」について

アフリカ学会の母胎として昨年7月に結成されたアフリカ研究会は「アフリカ研究」という機関誌を発行しておりました。この雑誌は学会成立により、学会の機関誌として発展的に解消致しましたが、残部が多少ありますので御希望の方にはおわけ致します。

第1巻 第1号 昭和38年12月発行 116頁 5600 (送料とも)

第2巻 第2号 昭和39年3月発行 70頁 5400

なお、日本アフリカ学会機関誌「アフリカ研究」第1号は目下印刷所に廻っておりますから、9月末頃には会員の御手元にとどけられると思います。

§ 会員カードについて

会員名簿作製のため、同封の会員カードに御記入のうえ、整理の都合上1週間以内に必着するようお願い致します。

§ 東京における共同研究会について

アフリカ学会は創立以来まだ日も浅く、これを真に全国的な規模でのアフリカニストの学会とするためには、組織の面でも運営の面でも会員の皆様に検討して頂くことが多々あります。今日までの学会の活動は、創立大会のほか、別報のように、東京では例会が開かれ、また名古屋大学、京都大学、天理大学でもそれぞれ研究活動が進められています。ところで、東京の場合ですが、上記の例会だけでは、専門分野間の共同研究によつて日本におけるアフリカ研究を一步でも前進させたいという学会創立の目的の一つを達成するには、なんとしても不十分の感がまぬがれません。これを補うために、特定の問題について積極的に相互の研究を促進し討論を積み重ねていく研究グループを結成したいという気運が一部会員の間で高まつて参りました。その一つの現われとして、さしあたり、政治学、経済学、歴史学、社会学、社会人類学などの人文・社会科学系の分野の在京会員有志によつて、9月から研究会を少くとも毎月1回開く計画が建てられています。まだ準備段階なので、研究テーマ、運営方法については最終的に決まつてはいませんが、ほぼ次のような方針で行う予定です。

1. 統一テーマをアフリカの近代化の研究におく。
2. とりあえず、初年度はローデシア、ザンビア、マラウイ（旧ローデシア、ニアサランド連邦）を含む東アフリカ地域（ただし、ソマリア、エチオピアを除く）をとりあげる。
3. 研究者は地域内における、ナジヨナリズムとトライバリズム、産業化と資本、都市化と移動労働、土地所有と農業、地域社会の構造的変化などの問題について、各々の専門分野に立脚しながら研究報告をする。

本プランの企画参加者は、現在のところ、西野照太郎、山田秀雄、中村弘光、藤田弘二、浦野起央、長島信らですが、関心をもたれる会員諸氏の参加を期待していますので、編集係までお知せ下さればさらに御連絡致します。

上述のように、この研究会の計画は在京有志会員による一つの試みにすぎません。すでに、京都や名古屋にはそれぞれの意味でアフリカニストの研究組織が存在している訳ですが、東京でもやはり研究組織を結成してはどうかというのが、これら在京有志会員の願いです。そして、このような研究グループがさらに問題ごとに結成され、密度の高い討論ができるようになれば、学会はより充実したものになると思います。そういうわけで、東京および周辺の会員諸氏のこの研究会への参加をおすすめするとともに、一般にこの提案にかんする御意見御批判を編集係まで、お寄せ下さい。

§ 質問欄の新設

会報第3号から会員諸氏からの質問欄を設けることになりました。アフリカに関すること、研究に関することなど、どのようなことでも結構ですから御質問を百字以内にまとめて編集係までお送り下さい。解答者は質問の内容によつて係が選定いたします。

§ 編集後記

第2号からこの会報の編集を担当することになりました。よろしくお願いします。

日本の夏の暑さはアフリカなみ、とのことですが、9月からは研究分科会も新に発足することですし、会員の皆様の夏の間の御研究の成果を楽しみにしています。（長島記）